



TITLE:

# 明代蘇州平野の農家經濟について

AUTHOR(S):

寺田, 隆信

---

CITATION:

寺田, 隆信. 明代蘇州平野の農家經濟について. 東洋史研究 1957, 16(1): 1-25

ISSUE DATE:

1957-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/148069>

RIGHT:

# 東洋史研究

第十六卷 第一號 昭和三十二年六月發行

## 明代蘇州平野の農家經濟について

寺 田 隆 信

- 一、はしがき
- 二、農村の變遷
- 三、農家經營の規模と構造
- 四、農村における副業の展開
- 五、むすび

### 一 はしがき

中國史上、所謂江南地方が基本的な經濟地帶としての地位を確保したのは、それほど新しい事ではない。すでに「晋」室の南遷以來、この地方の開発は急速に進み、「唐・宋」時代には、その經濟的な優位は決定的なものとなっていた。「蘇湖熟すれば天下足る」とか、「兩浙みのれば天下足る」などの諺が生れたのは、實にこの時代の事であった。

このような状態は、「明」代に入っても變るところではなかった。特に太祖が建國に際して、現在の南京を國都と定めた事は、統一帝國の都がはじめて揚子江以南の地に設けられたと言う事であり、それは江南地方の經濟的な優位を政治の世界が認めた事に他ならず、それ自體極めて劃期的な出來事であったと言わねばならない。ただ成祖の北京遷都は、政治

的中心と經濟的中心の一致の上に築かれた洪武體制を、再びもとの分裂狀態に復歸せしめる事となつたけれど、北方の政治の中心は「明」一代を通じ、更に「清」代にかけて、江南地方の經濟力によつて支えられたのである。<sup>1)</sup>

このように江南地方は歷朝の財政を賄う基本的經濟地帶であつたのと同時に、中國社會における經濟的な先進地帶でもあつた。「明」朝の經濟は、「元」末疲弊の後をうけて現物經濟を基礎としてはじまつたが、時代の経過とともに貨幣經濟が回復し、更にそれが發展するに従つて次第に變化して來た。特にその中期以後、中國では銀の産額が減少したにも拘らず、ポルトガル、スペインの商人によつて、當時新大陸で掘り出された銀が大量に持ち込まれたので、銀を中心とする貨幣經濟は社會のすみずみにまで普及するに至つた。<sup>2)</sup>

貨幣經濟の浸透が中國の社會に深刻な影響を與えたであらう事は容易に想像されるが、蘇州を中心とする長江下流のデルタ平野は、この大量の銀と取引される唯一の物資たる絹織物の代表的産地であつたから、その受けるべき影響も最も廣く且つ深かつたに違ひない。

本稿はこうした政治的・經濟的條件の下において、基本的且つ先進的經濟地帶たるこの地方の農村經濟を——特に蘇州を中心とする一帯の農村を中心にして述べることに、その變貌の過程と、副業經營發展の基盤と條件を探らうとするものである。その爲には、まず農村機構のうつり變りについて調べておかねばならない。

## 二 農村の變遷<sup>3)</sup>

「明」王朝の農村支配の體制は、里甲制を基幹として組織されていた。即ちこの王朝の專制的支配は、里甲制による農村の他律的自治組織と、これを基盤とする賦役徵收體系によつて維持されていたと言える。従つてこの里甲制を支える者は、元來自活自營出來ると言う事が必須の條件となるが、農村においてはその大部分は自營農民であつた。彼らは獨立自營の農民として里甲制の基幹となり、その上に成り立つ「明」朝の支柱となつていたのである。

一方、専制王朝としての「明」は、經濟的には當時の基本的・先進的經濟地帯たる江南特に長江下流のデルタ地帯に依存していた。この地方の租税負擔額が他の地方にくらべて遙かに高いものであった事は、すでによく知られているが、「明」代のそれは、歷朝の租税負擔にくらべて一段と重いものであった。

その理由は、この地方が王朝の運命を左右する基本的な經濟地帯として重視されていた事にもよるが、又、太祖のライバルとして最後までその覇業達成を妨げた張士誠の根據地としてこの地方が演じた役割に對する報復政策からでもあると説明されている。<sup>9)</sup>「元」末の頃、この地方には松江の沈萬三、嘉興の史有爲、蘇州の黃旭、湖州の紀定などという大富豪がいて張士誠政權を支えていた。太祖はここを平定すると、すぐに彼らの田を沒收して官田とし、從來の小作料をそのまま現物租税額と定めたから、その畝當りの課税額は甚だ高く、四斗から一石に及ぶものすらあったと言われている。しかも史料の示すところでは、官田の面積は民田にくらべて廣く、宣德七年・蘇州知府・況鐘の云うところによると、秋糧二百七十七萬九千餘石の中、民田の糧は僅かに十五萬三千餘石にすぎず、残りの二百六十三萬五千餘石はすべて官田の糧であつたと言ふ。<sup>9)</sup>

これを各府別にみて行くと、税糧負擔の最も重かつたのは蘇州府で、それに松江・常州の各府が續いたとされているが蘇州は一州七縣を屬縣としていたのに對し、松江は華亭・上海の二縣しか持たなかつたから、蘇州よりも松江府の方がより重い負擔に苦しんでいたのだと言ふ議論も成り立つ(陸深・儼山外纂)。

いずれにせよ、この蘇州を中心とするヒンター・ランドの租税負擔は甚だ重いものであつた。だがこの地方の農村は、かかる重税を負擔しただけではない。彼らは正役としての里長・甲首の責めを果たさなければならなかつたその上に、老人や、江南・浙江・江西方面にだけ設けられた糧長、更にデルタ地帯の地域的特殊性であるクリーク維持のための塘長の役をも負擔して行かねばならなかつた。<sup>9)</sup>

このような重税と重役とは農民の負擔能力を遙かに越えており、その完全な實施ははじめから不可能に近かつたと思わ

れるが、現實には里長戸や甲首戸の貧困化を促進するとともに、他方では尨大な租税滞納と、戸籍・土地臺帳の紊亂を招く結果となった。すでに宣徳末年には蘇州の連糧は七百九十萬石に達したと言われているが、これは蘇州の年間負擔額の三倍に近い數字であつたし、松江方面でも永樂から宣徳にかけて、前後十數年にわたつて滞納税の支拂いを免除しなければならぬ有様であつた。<sup>11)</sup>

「明」の賦役制度では、田土が租税の對象とされた事は言うまでもないが、その勞働役は人丁だけを對象として割當てたのではなく、資産としての田土の所有狀況をも考慮して課せられる事になっている。従つて、田土は税糧と役と二重の負擔を課せられたから、土地の所有額や所有名儀を誤魔化して、その賦役を忌避しようとする動きが起つて來るのは、至極當然の事であると言わねばならない。まして負擔能力を越える重税・重役の下であるから、時代とともに所謂詭寄生行爲はますます激しくなつて行く。<sup>12)</sup>

税役忌避のための偽瞞行爲の主役を演じたのは、役所の下級事務員たる胥吏と、民間の有力者・極く一部の富豪たちであつた。彼らは共謀して賦役割當の基礎となる賦役黃冊を紊亂したが、そのまずねらうべき點は、この地方における科則の複雑さにあつた。即ちその畝當りの課税基準は、この地方の灌漑農業に特有な零細耕地の實情を反映して、實に多種多様で、極端な例ではあろうが、蘇州府屬の嘉定縣では無慮千百則に及んだとされている。<sup>13)</sup>

彼らはここにづけて入つて官田をもつて民田とし、上等の田を下田と記録する事によつて、その負擔を軽くしようとしたが、その微不至はつまるどころ力の弱い人戸・言いかえれば當時の農村において最も廣範圍に存在した中農クラス及びそれ以下の農民に轉嫁されて行つた。だから納税期が迫ると家屋を賣り、田や牛などの生産手段を賣り、遂には妻子を賣る者、自殺をする者まで出る有様であつた。又、この農民たちが田を賣りに出す場合、少しでも高く賣る必要から官田を民田と稱して税額をかくしたり、低く言つたりするために、買手の富豪・地主は現實に土地を所有しておりながら税の負擔はなく、すでに土地を失つた農民には依然として税や役が課せられると言う不合理な事態を惹起した。<sup>15)</sup>そして遂にこれ

らの負擔に耐えかねて逃亡者が出ると、その税糧は里長や甲首が分擔しなければならなかった。<sup>16)</sup>

このようになかば公然と行われた偽瞞行為は、それだけでも極く少數の富豪と大多數の貧民をつくり出す有力な原因となり得たと考えられる。田土に關する偽瞞行為とともに、同様な動きが戸口の上にも現れていて、<sup>17)</sup>嘉山縣ではその最盛期とされる成化・弘治年間の人口が、洪武初年のそれより少なかったと記録されている状態であるし、又、正徳姑蘇志によれば、近年、脱漏や流亡によつて人口の増加が殆ど見られなかったと言われている。(同書卷十四・戸口)。

以上のような重税と重役、しかも田土・税糧、人丁についての不正行為から来る負擔は、農民の負擔能力を遙かに越えており、多くの農民たちはその犠牲となつて没落せざるを得なかった。それに老人や、本來里甲制とは別系統に屬す糧長の役には、家柄・徳望ある人物や殷實の戸が任命される慣しであつたが、彼らの中からも負擔の重さや官憲の壓力によつて破産の憂目を見る者が續出したのである。<sup>18)</sup>「明」代の江南特に蘇州地方は、財賦の藪として外に對しては富饒の名を負いながら、住民は重い役に苦しみ利益はすべて商人の手に歸して、内實は決して豊かではなかったと言われている。<sup>19)</sup>そして農民層の没落は逃亡戸の發生によつて必然的に農業人口の減少をもたらす。何良俊はその事情を次ぎのように述べている。

余謂へらく、正徳以前は、百姓十に一は官にあり、十に九は田にあり、……四、五十年來より、賦税日に増し、繇役日に重く、民命堪へずして、遂に皆業を遷す、……大抵十分の百姓を以てこれを言へば、巳に六、七分は農を去れり(四友齋叢說摘抄三・紀錄彙編卷百七十六)。

又、當時の農村では農業労働者を雇つて土地を耕作させる風が行われたようであるが、このような農業人口の減少は農業労働者の絶對數をも減少させたらしく、爲に彼等へ支拂うべき給料が高くなつたと言われているけれども、それは極めて有り得べき現象だと考えられる。<sup>21)</sup>

國家權力のする激しい収奪と、農村における有力者たちの横暴・税役忌避の不正行為とは、農村内部の機構や階級關係

に變動をおこさせる重大な原因となつたと言える。農村の「明」初的體制の崩壊は、一方には極めて少數の大土地所有者をつくり出したが、他の方向には多數の貧窮農民・小作農、そして最後には生産手段としての土地から切り離された流民を不斷に生み出したのであつた。

民の資力ある者は、占田は頃をもつて計へ、其の貧弱なる者は、畝をもつて計ふ（嘉靖常熟縣志卷四、食貨）。

と述べられているように、兩者の土地所有面積はもはやその單位を異にしていたようである。そして以上のような條件の下に、農民の貧困化と、それに伴う地主・佃戸關係は、時を追つて急速に進展したものと考えられる。

自營農民の没落と戸籍・土地臺帳の紊亂とは、ただに支配者の傳統的・儒教的政治理念に反するのみでなく、國家の財政に直接重大な關係を持つてゐる。従つてこのような事態を目前にして、江南地方ではすでに宣德の頃から清丈や各種の賦役制度改革が問題となつており、その徵稅方法を能率化し、農民の負擔を出来るだけ軽く且つ公平にして、租稅收入を確保しようとする官僚たちによつて、賦役制の改革が何度か行われ、又行われようとした。改革の必要を説く官僚たちの文章を見ると土地の所有關係が日々に變り、農村の經濟が如何に危機に直面していたかを知る事が出来る。

蘇松常三府は、土壤饒なりと雖も、民生甚だ困し、耕耘灌救、修築疏濬、やむ時ある無く、類ね皆食に乏し、又其の糧稅を轉輸するや、或は風盜の患に罹り、貴家に借貸し酬息を倍厚するを免れず、攘奪益々急に、兼并日に盛んにして、

もつて農民其の本業を棄て、膏腴の壤、漸く荒蕪するに至り、地利削りて國賦虧くを致す（天下郡國利病書第九冊、武進縣志・額賦、宣德八年巡撫侍郎・周忱）。

こうした官僚たちの努力は、商業の發達とそれに伴う銀經濟の普及・浸透・及びこの經濟環境に對應すべき統治階級の銀に對する欲求と結び附いて、ここに新しく一條鞭法の名で呼ばれる徵稅體系を生み出した。ただこの新稅法は劃一的に施行されたものではなく、その内容についても施行地域の狀況に應じて多少の相違があるとされているが、江南地方では大體嘉靖末から隆慶年間に至る時期にはじまつたと考えられている。

しかし一條鞭法の施行も、從來の弊害を一掃するほどの効果はなかったようである。その完全な施行のためには、例えば土地についてその所有關係を明確に把握して、紊亂行爲を嚴重に取締ると言う決意と實行が必要であるが、それは種々の利害關係が對立しているから容易な事ではない。従つて効果の期待出来るのは局部的・一時的であり、地方によつてはこの新税法は逆に商人・富豪たちの土地に對する投資熱をかきたてた形跡すら見られるのである。

とは言うものの、この新しい税法の施行は、それに伴う賦役の銀納化によつて、農村の經濟を變化させずにはおかなかった。そして貨幣經濟の浸透は、商人の農村に對する支配・影響力を一段と強力なものとしたと考えられる。すでに嘉靖常熟縣志は、

是の故に凡そ凶歲にあたりても、民力は必ず三、二歳を連ねて後甦へる。其の甦へりて幾くならざるに、これに據するもの繼いで至る。巨室は兼并の術を挟み、猾商は停閉の利を邀へ、大胥筆墨の求を行ひ、細民競ひて濫惡を爲して相欺き、而して食貨の中室以下に入る者幾くも無し(同書卷四・食貨)。

と言つて、農村における商人の投機的營業が行われていた事を明らかにしているが、この傾向は時代が降るにつれて一層活潑になつたであらう。

當時の社會には銀勘定と錢勘定の二つ階級があつて、兩者の間では經濟單位が違つていたわけである。そして本來ならば錢勘定のクラスに屬すべき農民たちは、この新税法の施行によつて強制的に銀經濟と結び附けられ、賦役を銀によつて代納するためにも銀を入手しなければならなくなつて來た。

このようにして最初は上からの強制によつて無理に銀經濟に向わなければならなかった農村の經濟も「明」の末・「清」朝初期の時代になると、魚肉果蔬などの食糧品の交易に錢を使用するにとどまり、一石以上の米、匹以上の布帛の取引には必ず銀が使われると言う段階にまで發達していたと言われている。従つてこのような經濟環境におかれ、更に政治的壓力を受けてひしひしと迫つて來る農村經濟の危機に對處するためには、農業經營の規模を擴大するか、それとも農耕以



外の何らかの副業經營を取り入れて収入を増加するか、二つの路しか考えられないわけであるが、この地方の農村は廣く後者の方法を採用する事によつてこの危機を切り抜けようとする。即ち棉花栽培と棉織業・養蠶と絹織業が農村における重要な副業經營として、この蘇州を中心とする長江下流の三角洲平野の農村に展開されるのである。

### 三 農家經營の規模と構造

「明」一代を通じて、農村特に江南の農村には明らかに兩極分解として理解されなければならないところの階級分解がおこりつつあった。しかもそれは、

吳中は田土沃饒たり、然れども賦税重くして俗は淫侈なり。故に百年の富室は有る事罕なり、大官たりと雖も、家一、二世にして輒ち敗ず（震川先生集卷二十五・勅封文林郎分宜縣知縣前同州判官許君行狀）。

と言われているように、一般農民だけがその渦中に巻き込まれたのではなく、一應の土地所有者として安定した生活を保證されていたかに見える人々をも含んでいたのである。もつて社會變動の大きさと深さを見るべきであるが、このような時流の中にあつて、現實に展開された一般農家の經濟規模とその構造はどのようなものであつたろう。

蘇州平野は古來富裕をもつて天下に聞えていた。従つてこの地には大富豪がかなり居住していた事は、先きに引いた史仲彬の致身錄によつて明らかであり、中でも沈萬三の富は江南第一と稱せられてゐる。<sup>25)</sup>だが彼らの財産は、太祖がこの地方を平定すると全部沒收されてしまったから、「明」初においては、この地方の富豪たちの財力はかなり小さくなつてゐたものと考えられる。

蘇州を以てこれを計らば、民歲ごとに糧を輸して百石已上四百石に至る者四百九十戸、五百石より千石に至る者五十六戸、千より二千石に至る者六戸、二千石より三千八百石に至る者二戸、計五百五十四戸、而して歲ごとに十五萬有奇を輸す（明實錄洪武三年二月庚午の條<sup>26)</sup>）。

これによると、多額納税者として三千八百石を年々納めていた者の土地所有高は、若しその畝當りの課税額を五斗<sup>27</sup>として計算すると、七十六頃と言う結果が出る。従つて歲輸百石の人は二頃前後の地主であつたと思われるが、これらの數字は必ずしも彼等の地主としての規模が小さかつたと言う事實を裏付けてはいない。

一概に土地所有高の大小と言っても、そこには時代差・地域差を考えないわけには行かない。「明」も末期の萬曆年間、松江府において、當時最大の役とされた布解に當るべき人戸の事を述べて

第一股實巨富の、田二千畝に餘り、家巨萬金を累する者をもつてこれに承つ（天下郡國利病書第八冊・萬曆庚戌華亭縣公紹昌布解議）……と言つているところを見るとその大體の大きさが理解出来るし、又同じ時代、松江府青浦縣でも最も重役たる細布解には、田二千五百畝の家が當つた模様である。

しかしこれらはいずれも、地主として少くとも中クラス、或いはそれ以上の部類に屬すべき者であろう。それにこれら直接賦役の對象として考えられた地主・富豪とは別に、例えば徐階・董其昌などと言う特權的な官僚出身の大富豪がいた事も周知の事實ではあるが、<sup>29)</sup>今ここで問題としなければならないのは、これらの土地がどのようにして耕作されていいたかと言う事である。言うまでもなく彼等は、この大量の土地をすべて自ら直接耕作したわけではなかった。その頃、長工とか短工とか呼ばれる農業労働者が存在しているが、この労働者を傭つて耕作させる場合もあつたろうし、小作に出す事もあつたろう。

すでに明らかなとおり、當時の農村においては階級の分解が急速に進み、農民の貧困化と、それに伴う地主・佃戸關係が廣範圍に展開しつつあつた。その間の事情は、

吳中の民、田を有する者十に一、人の爲に佃作する者十に九、其畝甚だ窄し（日知錄卷十、蘇松二府田賦之重）。

と記されている事によつて、極く零細な土地を小作する農家が、當時の農村において壓倒的多數を占めていた様子を知ることが出来る。

ところで、この地方における一家當り耕作可能の土地面積はどの位であつたろう。農民の九割を占めたと言う小作農の經營を知るためには、この點をまず知らなければならぬ。この場合、當地方の農業は灌漑農業であるから、灌漑に要する勞力の大小がそれを決定する大きな要素となるわけであるが、水利の便のよい土地は殆ど殷實有力の戸が占有しており、貧しい農民の多くは、耕作條件の悪い土地を耕さなければならなかつた事實を見逃してはならない。

蓋し各處の田は、肥瘠同じからずと雖も、然も松江の高下懸絶するが如き者有らず、夫れ東西兩郷は、但に土に肥瘠有るのみならず、西郷は田低く水平にして、車戽に易く夫妻二人にして、二十五畝を種す可く、稍勤なる者は三十畝に至る可し、……東郷は田高く岸陟つ……夫妻二人にして、極力耕種するも、ただ五畝を可とするのみ（何良俊・四友齋叢說摘抄三）。

これによつて、水利の便のよい處で最高三十畝、丘陵地帯にかかる地方では僅かに五畝しか耕せなかつた事情が明らかになるが、又蘇州から南へ、運河に沿つた地方の模様についても、

吾里の田地は、上農夫一人にして、ただ能く十畝を治するのみ、故に田多き者は、輒ち佃人をして耕植せしめて其の租を収む、又人稠に地密なれば、田を得るに易からず、故に貧者は賃田して耕す、亦其の勢なり（補農書・總論〃楊園先生全集卷五十）。

とあるところから考えると、やはり夫妻で十數畝から三十畝程度がその最大可耕面積であつたとして大して間違ひあるまい。

さて、地主と佃戸即ち小作人との關係についての具體的な説明と言う事になると、いろいろと議論の分れるところであるが、兩者の關係は次ぎの一文によつて一應明らかにする事が出来ると思う。

況や富室は自ら種うる能はず、必ず業は貧民と與にす、貧民は産を棄つと雖も、實に富室と其の利を與にす、一石を収むれば人五斗を分ち、十石を収むれば人五石を分つ、又牛力種子は富室より出で、錢糧又富室において辦す、時に水旱

あらば、富室又假貸してこれを濟ふ(天下郡國利病書第十冊・上元縣志寄庄議)。

この文章には地主的な意識が甚だ濃厚に感じられるとはいへ、地主に對する佃戸の依存の程度をうかがう事が出来る。小作料についてはこれによつても五割であつた事がわかるけれど、前記何良俊の文中にも、西郷の毎畝三石乃至二石五斗の收穫ある田は一石六七斗、東郷では一石五斗程度の收穫に對して多い者で八斗、少い方では黃豆四、五斗が、小作人から地主にわたされたと言われていて、大體收穫の半分或いはそれ以上と言うのが、當時一般の小作料であつたと考えられる。<sup>31)</sup> このような收穫の半分以上と言うかなり高率の小作料は、地主がこれ又高率の公税を負擔しなければならなかつた事と決して無關係ではなかつたと想像されるが、小作料を支拂つた後、佃戸の手に残る穀物は、その耕作面積の規模から考えて、彼らの一年間の生活を支えるはおろか、食糧としてさえ充分な量ではなかつたと思う。<sup>32)</sup>

以上の通り當時この平野に廣範圍に存在した小作農民の經濟は、この經營規模から考えても甚だ零細なものであつた。天工開物によれば、蘇州近郊の農村では牛を使つて十畝耕すより、人力だけで五畝耕す方が有利と計算される集約的な貧農の經營が行われた事が示されているが、一部の大地主富豪の大土地所有も、その多くはこのような極く小規模農業の算術的な積み重ねの上に成り立つていたのであらうと思われる。しかもここで注目すべきは、これらの零細經營は單に小作農だけに特有の状態ではなく、獨立の農家・特に、俗に士大夫と稱せられる階層をかなり多數含んでいたらしい事實である。例えば嘉靖末年の頃、湖州長興縣の知縣や太僕寺丞などを歴任した蘇州崑山縣出身の歸有光にあっては、彼の夫人が主になつて四十畝の田を耕した時期があつたと言ふし、萬曆三十九年・嘉興府桐鄉縣に生れ、一般に補農書と呼ばれている獨特の農業技術書を著した張履祥も、彼が自立した時は僅かに十四畝の土地を所有するのみであつた。又後に翰林院に召し出された董思白も、その諸生時代には瘠田二十畝を持つのみで、役の重さに耐えかねて家産を棄てて逃亡した經驗を持つてゐる。<sup>33)</sup>

それにもう一人、唐甄なる人物がある。彼はその幼年時代を父の任地たる蘇州吳江縣に過し、後、ここに定住して「清」

朝に仕えて山西潞安の長子縣の知縣を務めた事のある男であるが、恐らく彼の在野時代即ち「明」末の頃の事情であろうと想像されるが、こんな事を書き遺している。

唐子治長涇の田三十畝、謝莊の田十畝を有す、佃入は四十一石、賦は十に五、加耗・加斛及び諸費又これに一（十分の一の意味であろうか）し、二十三石と爲る、大熟すれば十八石を餘し、六口半年の用と爲す可きも、半熟すれば盡く税にして餘り無く、歲凶なれば物を典して以て納む（唐甄・潜書・上編下・食難）。

彼の告白するこの事實から考えると、この程度の地主の經濟的地位と言うものは甚だ不安定なものであったと言わねばならず、續いて彼の言うところによると、現實に最近七年間の實績は、七年間で合計百五十四石の税を支拂ったが、この期間は豐凶相半したから、彼の小作料収入は公税の額に達せず全くの赤字經營となった。そこで彼は地主としての生活に見切りをつけて、この四十畝の土地を六十餘金でたたき賣り、これを元手に二人の家僕を使つて商賣をする事になっている。これらはいずれも特權的な士大夫階級に屬すべき人たちであるが、以上の事情を綜合して見ると、その生活の基盤としての農業經營にしても、又地主としての規模から言つても、先きにあげた地主たちの所有面積にくらべて遙かに小さいものであった。それは當時の小作農や一般農民のそれにくらべた場合においてすら、それほど懸隔のあるものとは言えない程度のものである。補農書の著者が、友人・徐敬可が故郷に卜居せんとするに際して與えた注意書きの一節に

三吳の地、四十畝の家は、百人にして一を得ず、其の躬親買置する者は、千人にして一を得ず（楊園先生全集卷八・與徐敬可）。

とあるのを思いあわせると、「明」代、この蘇州平野には、經營面積にして二、三十畝或いはそれ以下の零細農家が自作農又は小作農の別なく、しかも士大夫階級をもその中に含んで廣範圍に存在していた事がわかるのである。

獨立した自作農にしろ、地主の土地を借りて耕す小作農にしろ、このようにその經營面積が甚だ小さいから、土地からあがる收穫には當然多くを望む事は出来ない。今ここで彼らの農耕からする經營の實態を計算してみると、若し土地十畝

を耕しているものと假定すれば、當時の畝當り收穫量は最高三石、低くて一石程度であつたから、平均二石として二十石の收穫がある事になる。一方家族一人一年に平均四石食べ、家族數を平均五人とすれば、二十石の穀物は、ようやく家族一年の食糧だけにしか當らないと言う事になる。<sup>40)</sup>従つて小作料や政府への賦税などを捻り出す餘裕などは全くなかつたと言わなければならない。

これは一つの假定の上に立つた計算であつて、現實とは必ずしも一致しないかも知れないが、當時の農民の生活について正徳姑蘇志はこのように述べている。

農人最も勤にして分に安ず、四體焦瘁するも、終歲休まず、産無き者のときは、赴きて顧倩を逐い、直を受けて賦事し、抑心殫力す、これを忙工と謂ふ、又少しく隙あらば去きて魚鰕を捕へ、采薪埏埴、備作擔荷、少くも自ら偷惰なるを肯ぜず、收穫の餘に至りては、公税私租償責するの外、其の場遽かに空なる者十に八、九、然も帖々として自ら甘じ、尤怨を知らず(同書卷十三・風俗)。

彼らは寸暇を惜んで働いたけれども、その生活は樂になるどころか、公税や私租を支拂つた後には殆ど何も残つていなかったと言う。そこで多くの農民は附近の富人——恐らく地主か商人、或いは高利貸であらう——から、米や銀を借りて來て急場をしのいだわけであるが、それは翌年の收穫期に、高率の利息をつけて返済されなければならなかつた。<sup>41)</sup>

このような條件を考えあわせると、當時この地方において最も普通の規模であり、従つて壓倒的多數を占めていたであろう零細農家にあつては、農耕を行うに際しては必ずと言ってよい位に負債がつきまゝと思われる。<sup>42)</sup>しかも彼らが農具や肥料などその再生産に必要な道具や物資を購入していた事は、すでに先學が明らかにするところである。<sup>43)</sup>

それ故に、この長江下流のデルタ地帯に生活する一般農家においては、先きに明らかにしたような農村の經濟的な危機に對應し、しかも政治的・地主的収奪に耐え、農耕に伴つて必然的につきまゝとう負債と現金支出をカバ―して、その生計を維持して行くためには、彼らはその努力を零細な耕地に注ぐ以上に、米作を中心とした從來の經營方法を改めて棉作や

養蠶を採用する事や、副業的な家内手工業たる織布業を取り入れる事に、より積極的にならざるを得なかったのである。かくしてその農家經營は次第に變貌し、その比重は副業經營の重視へと傾いて行く。

#### 四 農村における副業の展開

農村における「明」初的體制が崩壊するに従つて、この蘇州を中心とするヒンター・ランドの各農家は、前述のような政治的・經濟的そして社會的な強制の下において、その經營を維持して行くために、農耕の他に副業としていろいろな企業を取り入れる事になった。彼らの農業經濟には、從來の土地と勞力の枠を破つて、それらをどのように有利に運用するかと言う本來の意味で「經營」と呼ばれるべき要素が加えられなくなつたのである。そしてこの場合、その副業經營が種々の強制の下で、受身の型で採用されたと言う事は無視されてはならないし、その事はその將來の發展をも規制する重要な要因となつたであらう事も忘れてはならない。

農村副業がどのような形式をもつて展開したかはさておき、純農耕の經營から次第に家内手工業が各農家に取り入れられて行つた事情は、乾隆年間に編纂された震澤縣志が次ぎのように説明している。

綾紬の業は、宋元以前にあつては、惟郡人これを爲すのみ、明の(洪)熙・宣(德)の間に至るや、邑民始めて漸く機絲を事とす、猶往往郡人を僱ひて織挽するのみ、成化より後、土人も亦其の業に精なる者有り、相沿ひて俗を成す、是において震澤鎮及び近鎮各村の居民、乃ち盡く綾紬の利を逐ふ(同書卷二十五・生業)。

これは蘇州から吳江へ、それに續いて周邊の農村へと、時代を追つて擴がつて行つた震澤近邊の絹織業について述べたものであるが、これによつてすでに成化以後の時代には、農村のすみすみにまで絹織業が普及していた事がわかるのである。

當時この地方の農村において廣く展開された副業經營は、棉花の栽培と棉布の製造加工・養蠶・製糸と絹織業と言うの

が主要な形態であつた。

まず棉花栽培とその加工業である棉織業について見ると、それはこのデルタ平野の東部、北部地帯、即ち蘇州府治下の長江沿いに位置する常熟・嘉定・崑山の各縣から太倉州の一帯と、その東隣り松江府屬の地方を中心として發展した。元來この地帯は岡身と呼ばれる丘陵地帯であつて、灌漑設備の關係から、水稻を中心とするよりも、棉花を栽培した方が條件として有利であり、又その土地が砂地で棉花の栽培に適していたから、古く「元」の頃からその栽培が盛んに行われており、「明」の時代になつてから、棉布による租税の折納が許されるようになると、米作を壓倒して農業經營の主體とも言える位盛大に行われるようになった。その爲に嘉定縣地方では全く水稻をつくらなくなつたから、その食糧はすべて商人の手によつて他の地方から運び込まれていたと言ふ状態であつた。<sup>45)</sup> 棉作と直接關係がないにしても、すでに「明」の中期以後には湖廣方面から大量の米穀がこの蘇州・松江にむかつて輸送されていた模様であるが、この事はこの地方における農業經營の變貌、それに伴う食糧不足と決して無關係ではないと思ふ。

このように棉花が大量に生産されると、これを原料として各農家では絲を紡いで棉布を織つたのである。棉業は農村と言わず都市と言わず、廣範圍に展開されて行くが、各地に棉織業が發達して來ると、それぞれの地方にその土地を代表する特産品が生れ、それが又特別の名稱をつけて市場に出廻るようになった。<sup>43)</sup> しかもその織布技術は次第に進歩して、古い傳統を持つ蘇州・杭州のそれにくらべて全く遜色ない水準に達したと言われている。<sup>46)</sup>

ただこの棉業については、すでに西嶋定生氏に一連の詳細な研究があるから多言を必要としない。従つてここでは、農村における棉業がもはや副業などと言う生易しいものでなく、殆ど専業とも呼べるような程度にまで廣く行われていた事を指摘すれば充分であらう。それは

織者率ね日に一疋を成り、通宵寢ねざる者有り、田家收穫は、輸官償息するの外、未だ歳を卒へざるに、室廬已に空なり、其衣食は全て此に頼る(萬曆上海縣志卷一・風俗)。



と言う記載からだけでも、容易に理解する事が出来ると思う。そして士大夫の家庭でも、夫人自ら家計の不足を補うために、しかも晝夜の別なく紡織に勵んだ事を示す記録もかなり多數發見する事が出来る。<sup>51)</sup>

棉織業はこの棉花栽培地域にだけ行われたわけではない。それは蘇州府屬の南部諸縣や湖州・嘉興地方に至る一帯にも廣く行われていたらしい。この地方は元來養蠶地帯とされ、棉花は栽培されていないにも拘らず、<sup>52)</sup>農耕・養蠶のかたわら棉絲を紡いで布を織ったのである。

即ち、前記張履祥の家では父の死後家計は困しく、祖父は附近の鑪鎮に店を開き、母は紡績によって彼ら兄弟の授業料を賄ったと言っているし、<sup>53)</sup>嘉靖年間、嘉興府屬の各縣では棉花が手に入らないため、その加工によって生活を支えていた農民は座して死を待つ状態<sup>54)</sup>であつたと言う。又、太湖方面でも棉花を購入して棉布を織る者が次第に増加しつつあつた事情を傳える史料もある。<sup>55)</sup>

このように本來養蠶地帯と目され、棉花をつくらない地方においても、紡織が行われていたと言う事實は、その機械り技術や設備が精巧な絹織物をつくり得る程度にまで進んでいなかったと思われる農家において、蠶を飼育して生糸を市場に出す一方、その代金で棉花や棉糸を買って棉布を加工すると言う經營方式が、かなり廣く且つ深くこの方面の農村に浸透していたのではないかと言う事を想像させる。

さて、農村における棉業經營の内容であるが、前述のような零細農家がその主體となつている事を考えると、收穫された棉花や製造された棉布は、直ちに市場に賣り出して貨幣に換えられねばならなかつた。<sup>56)</sup>しかも彼らは激しい政治的・地主的収奪の下にあつたから、こうして獲得した収益は右から左へ公税や小作料・負債の穴うめのために支出されるのが實情であつた。褚華の木棉譜に見える次の詞が、その間の事情を明らかにする。即ちその一節には

半擬償私債、半擬輸官賦……以筵壓板搓成索、晝夜紡車聲落落、車聲纔止便上機、知作誰人身上衣、小女背面臨風泣、憶曾隨母田中拾、寸縷何嘗得挂身、完過官私剩空室、

と言っているし、これに續く王晦の作と言う「吉貝花歌」の後半の部分は

歸來索賈價苦賤、百計經營供婦織、機聲軋軋寒月闌、十指痛裂心不惜、待輸公賦償私逋、縱成萬布難存一、  
と、その激しい勞働と苦しい經營の實體を語って、次ぎのような言葉で結んでいる。

吁嗟、此物衣被天下民、回看農婦兩脚赤。

このように蘇州平野の北部・東部の丘陵地帯を中心として棉業が展開されたのに對し、その西部・太湖周邊から湖州・嘉興・杭州方面にかけての一帶は、その精巧な絹織物によつて古くから有名な絹織物業地帯であつた。それが「明」の中期以後になると、從來の都市中心の企業と言う殻を破つて、廣く近郊の農村へと擴がつて行つた様子は、先きの乾隆震澤縣志の記述が明らかにするところである。

養蠶の行われたのは「清」朝初期でも蘇州の南から杭州に至る方千里を越えない範圍の地方であつたと言われているが、この方面の農村經濟はかなりの程度に養蠶・製絲の收入に依存していたようである。<sup>67)</sup>

湖民は蠶をもつて田と爲す、故に謂ふ、勝意すれば饒を増し、失手すれば坐して困しむ(謝肇淛・西吳技乘)

と云われている。それに貸借關係なども、すべて蠶務終了の時期をもつて清算すると言う風習を持つ地方もあつた。<sup>68)</sup>

ただ一口に絹業と言つても、そこには一種の分業にも似た關係が成り立っていて、蘇州・杭州が絹織物の産地として有名であつたのに對し、湖州・嘉興地方はその生糸によつて知られていた。湖州附近の農民については、

湖民本に力め射利す、計悉せざる無し、尺寸之堤も、必ずこれに桑を樹ゑ、環堵の隙にも、必ず課すに蔬を以てす、富者は田阡陌を連ね、桑麻萬頃あり(西吳技乘)。

と記されていて、彼らが極く狭い土地にも桑を植えた事がわかる。この桑の葉で育つた蠶からつくられた生絲は、特に湖糸と呼ばれて最も品質が優れているとされており、中でも「七里」と言う銘柄の生糸が優秀であつて、蘇州へ運ばれてその地の絹織物の原料として使用される外、福建方面へも大量に送られていたようである。<sup>69)</sup>

養蠶農家はその土地に桑を植えて桑の葉を自給する一方、不足分は他郷から購入したが、桑葉の値段は激しく變動するのが常であつて、資力のある者は俗に秒葉と呼ばれる代金前拂いの方法によつて他家の桑葉を購入した。<sup>61)</sup>それは代金後拂いの方法より遙かに有利であつたと計算されているが、大部分の養蠶農家は、その規模から言つても不斷に資本の不足に苦しんでいたのであるから、このような有利な買ひ方は出来なかつたであらう。

それにも拘らず農家にとつては、養蠶は農耕よりも一段と収益が多かつたらしい。<sup>62)</sup>張履祥・補農書の計算によれば、一畝の田は豊年でも米三石・春花一石餘りの收穫が關の山で、平年作では大體三石程度である。しかし一畝の土地に桑を植えると、蠶十數筐を飼う事が出来、少い時でも四、五筐、最下クラスでも二、三筐は確實である。そして米が賤く生絲の値段の高い時には、蠶一筐の収入は田一畝の収入に匹敵し、米が貴く絲が暴落した時で、やつと兩者の収入が同じ位になるのだと言ふ。<sup>63)</sup>絲價の變動を考慮しても、なお且つ養蠶収入は主穀生産よりも有利であつた事がわかる。

ところが、補農書の前卷にもあたり、富裕な農民或いは自作小地主の具體的な農業經營を記したものとされる沈氏農書<sup>64)</sup>の計算によると、蠶一筐の飼育費として桑葉百六十觔、蠶炭一錢、盤費一錢を要し、これから生絲一觔がとれる事になっているが、その収入は僅かに飼育費を賄うに足るだけで、若し何らかの事故で収益が減ると、桑の代價すら支拂えなかつたと言ふ。事實、一般養蠶農家の經營は全くそのようなものであつたと考えられ、

……夜半に起飼し、日晏にして食す、拮据すること幾ど一月、桑或ひは踊貴すれば、簪珥を脱して、質庫に付し、眉睫の急に應ず、或ひは倍收し、或ひは子母を償ふに足りず、一にこれを天に聽すも、歳ごとに勞するを辭せず(丁元薦・西山日記)

と言ふのがその現實の姿であつたらう。

こうしてつくられた繭から生絲が出来るのであるが、當時の養蠶農家は自家で繭から生絲をとり、その生糸を市場に出すのが常であつたらしい。養蠶農家では「生女未だ笄に及ばざるに、教ふるに育蠶を以てし」(崇禎吳縣志卷十・風俗)、「四

戸を以て蠶月と爲し、家々戸を閉し、官府の勾攝徵收、及び里閭往來慶弔、皆罷めて行はず」(西吳枝乘)、「新婦は箔を守り女は簪を執り、頭髮梳らざること一月の忙」(明高啓の詞)と言うように、全家族を動員して養蠶に専念したのであるが、こうして蠶がとれると、夏税の納付期限が迫っており、休む間もなく製糸の仕事にとりかからなければならなかったのである。<sup>66)</sup>そしてこうした粒々辛苦の末に出来あがつた生糸も、生産者たる農民の身を飾るためには殆ど用いられる事はなかった。

湖絲天下に徧しと雖も、湖民の身には一縷も無し、慨くべし(宋雷・西吳里語)と。

生糸の生産に續いて農村における家内手工業としての絹織物業についてであるが、絹織物は元來その精巧さを誇る一種の奢侈品であつたから、その製作には高度の技術を必要としている。従つて農村の副業的絹織業が短期間のうちにこの技術を身につける事は困難であつたと考えられ<sup>67)</sup>、絹織業に關する限り、都市の専門業者たる機戸のその生産に占めた比重は、棉布の場合にくらべて一段と高かつたはずであり、現實に一般農家は主として生糸を市場に出すにとどまつた模様である。この事は棉花を産しない養蠶地帯の農村に、絹織業ではなくて、紡績・織布の仕事が普及していた事實からも、充分裏附ける事が出来るだろう。

ところで、農村の副業經營においては、その主要な勞働力は家庭内の婦人が中心となつて提供した。だから副業の普及は、婦人勞働の農家經營に占める役割を次第に向上させたものゝようである。もつとも純農耕の場合でも、現實には婦人の勞働力を無視出来ないのは言うまでもないが、副業とはいへ、それが一家の經濟に占める位置が高まるに従つて、彼女らの稼ぎは、あらためて認識されるようになった。彼女らの能力は、一家の經濟は言うに及ばず、ひいては家運の盛衰にも重大な關係を持つと考えられて來たのである。

女工勤なる者は、其家必ず興り、女工遊惰ならば、其家必ず落ふ<sup>68)</sup>。まさに男事と相類す……故に曰く、家貧なれば賢妻を思ひ、國亂るれば良相を思ふ、其の輔佐に資する事、實に勢として相等し(補農書・總論)。

と言われている如くであつて、夫が田十畝を耕し、妻が蠶を十筐飼ひ、一日に布二疋を織るか、又は棉糸八兩を紡ぐ一家は、饑寒を憂ふ必要はないとされている。<sup>68)</sup> 中國の傳統的な考え方が理想として來た男耕女織、農家本務と言う農家經營はここにおいて耕と織とが同じレベルで論じられねばならなくなつたわけである。

以上のとおり問題にして來た農村の副業は、棉業にしる絹業にしる、それはすべて自家消費のためのものではない。それが政治的・經濟的・社會的壓力の下で、時を逐つて増大する農家經濟の危機に對應して行われたものであつたとはいへ、棉花・棉糸・棉布・生糸そして絹織物などの製品は、商品として市場で販賣するためにつくられたものであつた。一般農家の經濟は、農耕収入とともに、これらの副業収入にとつて支えられていたのである。土地からの収益に對して、この副業經營の利潤が——それは農家の手には殆ど残らなかつたとはいへ、形式の上では一應市場からの貨幣収入の型をとつて——一定のウェイトを持つたと言うこの事實は、若し現物収入に對する貨幣収入の比率によつて、その商品經濟化が計れるとするならば、ここに對象として取りあげた農家の經營は、甚だ受身的であつたとは言ふものの、かなり高度に商品生産化しており、従つてその市場との結び付きも極めて密接なものがあつたと言わなければならない。

## 五　　む　　す　　び

「明」朝二百七十餘年の歴史を通じて、その財政上の支柱となつた長江下流のデルタ地帯・特に蘇州・松江を中心とするヒンター・ランドの農村は、激しい政治的収奪をうけ、しかもそれと決して無關係ではない地主の搾取・横暴などに耐えなければならなかつた。とともにこの地方は當時における先進經濟地帯でもあつたから、この王朝支配の中期以後の時代には、次第に浸透して來る貨幣經濟にも對處して行かなければならない事情にあつた。

一方、一部の地主層を除いては、この地方に展開された大多數の農家經營は、灌溉に頼る極めて集約化された農法の影響もあつて、その耕作面積は非常に零細なものであつたから、この激しい収奪の下においては、どうしてもその經營を維

持して行く事は困難になつて來た。

このような事情の中におかれた農村の經營は、政治的・地主的、そして經濟的な壓迫に耐えて、その生計を維持して行くためには、どうしても農耕に頼るだけでなく、廣く副業を採用しなければならぬ狀況に於つた。そして、農村の副業經營はこうした條件の深刻化にもなつて、時を逐つて次第に廣く且つ深く農家經營の中に浸透して行つた。それは必ずしも能動的に發展したものとは言えないけれど、すでに「明」の末期には、農耕と殆ど同じ程度の比重を、一般農家の經營の中に占めていたと考えられるのである。

以上が本稿の結論であるが、若しこのように、現實に展開した農家經濟が副業収益に大きく依存していたとするならばその實態を更に明確に理解するためにも、副業生産品の販賣・即ち農家經濟の商品市場との結び付きの問題が追求されねばならないと思う。それには、この平野における都市及び都市的聚落たる鎮や市の發達と言う現象を見逃してはなるまい。これらの都市は蘇州がその中心的・代表的存在であるが、すべて商業都市と云う性格を持っており、特に農村地區に散在する鎮や市は、副業製品の商品市場として、直接農村の經濟と結び附いていたものと考えられる。即ち農村における副業經營の發展と言う現象は、前述の如き政治的・經濟的・社會的な條件に對應すると同時に、これら都市の發展を促進する役割を演じており別の方向から觀察すれば、この都市において成立する商品市場に農家經營が適應させられて行つたと言う性格を持つものと考えられるからでもある。

ただその爲には、都市に成立する商品市場とその經濟機構とを明らかにする事が先決問題であるが、それは史料的な制約もあつて、現在の筆者の能力をもつてしては、とうてい近寄り難い難問題ではあるが、近い將來、或いは遠い將來の事になるかも知れないけれど、何時かはこの問題を明らかにして、もう一度ここで考察した農家經營を外側から觀察しなおしてみたいと思つてゐる。

本稿は、去る三月、大學院の修士課程を修了するにあたって「明代蘇州府の發展と農村の變貌」と題して提出した研究報告の中から、農家經營に關する部分をまとめたものである。なお本稿作成に際して、宮崎教授より懇切なる御指導を賜っている。ここに厚く御禮申しあげます。

補注

- (1) 宮崎市定・明代蘇松地方の士大夫と民衆(史林37・2)
- (2) 百瀬弘・明代の銀産と外國銀に就いて(青丘學叢第19號)・小竹文夫・近世支那經濟史研究(弘文堂・一九四三)
- (3) 本節の主要部分は、清水泰次・中國近世社會經濟史(西野書店・一九五〇)・栗林宣夫・明代後期の農村と里甲制(東洋史學論集4)・岩見宏・明の嘉靖前後に於ける賦役改革について(東洋史研究10・5)などの諸研究に負うところが大きい。
- (4) 天下郡國利病書第5冊・蘇州府財賦  
なお本稿の使用する利病書は、すべて四部叢刊本である。以下引用する天下郡國利病書は單に利病書と記す。
- (5) 顧公燮・消夏閑記摘抄卷下・蘇松糧重之由。
- (6) 史仲彬・致身錄。
- (7) 一例として正德姑蘇志の統計を引くと  

	宣田	民田
樂土田(七縣)	29,900頃	29,045
”(一并七縣) 田畝16畝	65,003	34,697

と見えているが、他の地志に見える統計もすべてこれと同じような結果を示している。
- (8) 明實錄宣德七年六月戊子の條。

- (9) 利病書第7冊・嘉定縣志、徭役。
- (10) 明史卷78・食貨志二・賦役。
- (11) 顧炎武・日知錄卷10・蘇松二府田賦之重に引かれた杜宗桓上巡撫侍郎周忱書による。
- (12) 清水泰次・明代の稅役と詭寄(東洋學報17・2・3)・祝允明・野記卷1・范濂・雲間據目抄卷4・記賦役。
- (13) 利病書第7冊・嘉定縣志、田賦。なおここに言う千百則とは具體的な數字を言っているのではなく、單に課稅基準が多種多樣であつた形容として使われた言葉かも知れない。
- (14) 陳繼儒・見聞錄卷1・震川先生集別集卷9・長興縣編審告示。朱國禎・湧幢小品卷14・緒帖。
- (15) 見聞錄卷1。
- (16) 山根幸夫・明代里長の職責に關する一考察(東方學3)
- (17) 嘉靖崑山縣志卷1・戶口。
- (18) 消夏閑記摘抄卷中・籍富民爲糧長。雲間據目抄卷4・記賦役。
- (19) 利病書第6冊・吳縣城圖說。說者謂、役累土著、而利歸商人、重其然乎、故外負富饒之名、而內實饑困者、智俗使然。
- (20) 傭工とよばれる當時の農業勞働者については、沈氏農書・運田地法の條にみえており、又これを基礎にした古島和雄・明末長江デルタ地帯における地主經營(歷史學研究140)と言う研究もあるが、

傭工を雇うと言う事は、農村における副業の發展に伴つておこる勞働力不足カバットの意味をもっているものと思われる。

(21) 湧幢小品卷2・農蠶。近年農夫日貴、其直増四之一、當由務農者少。

(22) 利病書第10冊・上元縣志、寄庄議……往昔田糧未均、一條編未行之時、有力差往々破人家、人皆以田爲大累、故富室不肯買田……賴巡撫海公均田糧、行一條編法、從此役無偏累、人始知有種田之利、而城中富室、始肯買田……

(23) 謝肇淛・五雜俎卷12。今天下交易、所通行者、錢與銀耳、用錢便於貧民。

(24) 唐甄・潛書下篇上・更幣。今雖用錢、不過以易魚肉果蔬之物、米石以上、布帛匹以上、則必以銀。

(25) 五雜俎卷3、其他。

(26) これと同様の記載は、祝允明・野記卷1にも見えているが、それには二ヶ所ばかり文字の誤りがある。

(27) 畝當りの課税額を五斗とする根據にそれほど積極的な史料を持つわけではない。それは當時における官田の糧としては低い方であり、民田のそれとすれば高すぎると言つた程度のものであり、若し富豪の所有する田の多くが民田で、負擔の重い官田が一般農民たちの耕作地となる傾向があるとすれば、ここに言う富豪の土地所有高は更に大きなものとなるだろう。

(28) 利病書第8冊、均役全書序。

(29) 宮崎市定・前掲論文参照。

(30) 利病書第6冊。蓋不出涇之田、澇則不得澆、旱則不得溉、糞則難於入、斂則難於出、凡有此田者、多是貧難下戶、當優恤者也、若

其橫出涇者、與長倚涇者、旱則易於澆、澇則易於澆、糞則便於入、斂則便於出、有此田者、多是殷實有力者也。

(31) 何良俊・四友齋叢說摘抄三(紀錄彙編卷176) 西鄉……且土肥穫多、每畝收三石者不論、只說收二石五斗、每歲可得米七八十石矣、故取租有一石六七斗者、東鄉……若年歲豐熟、每畝收一石五斗、故取租多者八斗、少者只黃豆四五斗耳。

(32) 當時の小作料として史料の傳えるところを表にあらわすと、次ぎのようになる。

地名	時代	收穫率 (斗)	小作率 (斗)	比率(%)	典據
吳江	康熙		8~17(8)		康熙吳江縣志卷5・風俗
震澤	乾隆		5~18		乾隆震澤縣志卷25・生業
華亭	康熙?	15~20	10~15(6)	70~80	閩世顯卷1
青浦	康熙?		4 <sup>12</sup> / <sub>8</sub> ~9		
上海	康熙?		4 <sup>12</sup> / <sub>8</sub> ~9		
松江	明・嘉靖	125~30	16(7)	53~64	四友齋叢說摘抄
吳江	清初	F15	7	53	三 遊書・食難

(33) 嘉靖崑山縣志卷4・風俗、農家最勤、習以爲常、至有終歲之勞、無一朝之餘、苟免公私之擾、則自以爲幸、無怨尤者。

米作經營がこのように殆ど農家の手に何も残さなかつたから、當時の農村では裏作としての麥作が、かなり盛んに行われたらし。(崇禎松江府志卷6・物産、麥の條)。

(34) 天工開物卷上、乃粒第一卷・稻工。

(35) 錢謙益撰、震川先生小傳。震川先生集卷17・畏壘亭記。



(36) 楊國先生全集所收の年譜。及び同全集卷3・答吳仲木の條。

(37) 李延昱・南吳舊話錄卷18・董思白。

(38) 潛書所收の西蜀唐園亭先生行略。

(39) 潛書上篇下・食難。嘗通七歲計之、賦一百五十四石、豐凶相半、

佃之所獲、不足于賦、典物以益之者六斛、而典息不與焉；于是賤

罵其田、得六十餘金、使袁乃原、販于震澤、賣于吳市、有少利焉

(40) この計算が成り立つ基礎は次ぎのようなところにある。即ち當時

この方面の土地一畝からの收穫が二石乃至三石程度であつた事は

前掲の各史料の示すとおりであり、又、天野元之助・天工開物と

明代の農業(天工開物の研究)にもそれを裏附ける記述がある。そ

れから一人一年の穀物消費量は、沈氏農書に傭工一人の食糧とし

て五石五斗としているから、大體平均して四石乃至五石として大

きな間違いはあるまい。それから普通農家の家族数であるが、補

農書の附録・策郎氏生業の條によれば、この一家は五人家族であ

つたようであるし、前記唐甄の家族も六人であつた事が潛書に記

るされているから、一般の家庭の家族数も普通五・六人であつた

と考えられる。

(41) 嘉靖常熟縣志卷11・集文(張洪・濟農倉記)。當春夏之交、農民之

力畝畝、而餽粥不繼、未免出加倍之息、資之富人、富人與之若投

餌、穀始登場、則勾取其子本、以備存之餘、供倍徙之賦、不足、

又舉而償之。

(42) 古島和雄・明末長江デルタ地帯における地主經營(歴史學研究140)

・天野元之助・天工開物と明代の農業(天工開物の研究)。

(43) 虞川先生集卷8・論三區賦役水利書。三區雖隸本縣、而連亘嘉定

迤東沿海之地、號爲岡身、田土高仰、物產瘠薄、不宜五穀、多種

木棉、土人專事紡績。

利病書第7冊、王錫爵永折漕粮碑記。

(44) 西嶋定生・支那初期綿業の成立とその構造(オリエンタリカ・2)。

(45) 利病書第7冊・嘉定縣志、兵防考。縣不產米、仰食四方、夏麥方

熟、秋禾既登、商人載米而來者、舳艫相銜也、中人之家、朝炊夕

爨、負米而入者、項背相望也。

(46) 湧幢小品卷26・普陀。近日有茶山王之說、傳者歷々若親見、且謂、

聚至數萬人、販米于蘇松等處、庚申湖廣至蔡米不許下江、曰恐茶

山王糴去也、米一時踊貴。

藤井宏、新安商人の研究(東洋學報36・1)P19以下、及び世界

歷史事典10・清代の條。

(47) 嘉靖崑山縣志卷4・風俗・萬曆上海縣志卷4・風俗の兩書とも記

載は全く同じである。即ち、紡績不止鄉落、雖城中亦然、と。

(48) 正德姑蘇縣志卷14・工產。崇禎松江府志卷6・土產。

(49) 嘉靖崑山縣志卷4・風俗。前志云、百工衆技、與蘇杭等、要之吾

鄉所出、皆切於實用、如綾布二物、衣被天下、雖蘇杭不及也。

(50) 西嶋定生・松江府に於ける綿業形成の過程について(社會經濟史

學13・11・12)、支那初期綿業市場の考察(東洋學報31・2)、明代

に於ける木棉の普及に就いて(史學雜誌57・4・5・6)、支那初

期綿業の成立とその構造(オリエンタリカ2)。

(51) 虞川先生集卷21・龔母秦孀人墓誌銘。

南吳舊話錄卷18、張個初。張個初苦貧、其夫人晝夜紡紗、供燈火

資、嘗三四年、不買一響。

(52) 補農書(楊國先生全集卷50所收)補農書後。

(53) 楊國先生年譜。楊國先生全集卷21・先世遺事。

64 馮汝弼・祐山雜記。嘉靖十七年、至二十二年、嘉興各縣荒、二十三年甲辰大荒、平湖海鹽尤甚、鄉民力田之外、恒以紡織爲生、是歲木棉早穢、籽柵爲空、民皆束手待斃。

65 楊園先生全集卷34言行見聞錄四、洞庭富室席氏の條。

66 利病書第7冊・嘉定縣志風俗。市中交易、未曉而集、每歲棉花入市、牙行多聚。

その他、嘉靖崑山縣志。萬曆上海縣志の風俗の條。南吳舊話錄卷9・徐長石「布賦」。楮華の木棉譜などには、農民が棉花・棉糸・棉布を都市の市場に賣りに行く事を示すかなり多くの史料を見つかる事が出来る。

67 潛書下篇下・蠶蠶。

68 利病書第32冊・崇德志。

69 湧幢小品卷2・農蠶。

70 王世懋・閩部疏（紀錄彙編卷207）。

61 湧幢小品卷2・蠶報。湖之畜蠶者、多自栽桑、不則豫租別姓之桑、俗曰秒葉：本地葉不足、又販于桐鄉洞庭、價隨時高下、倏忽縣絕、諺云僊人難斷葉價。

62 徐獻忠・吳興掌故集卷13・物產類。蠶桑之利、莫盛於湖、大約良地一畝、可得葉八十箇：計其一歲、墾鋤墾培之費、大約不過二兩、而其利倍之。

63 補農書、補農書後の條。

64 古島和雄、補農書の成立とその地盤（東大・東洋文化研究所紀要

第3冊）。

65 沈氏農書・蠶務。（楊園先生全集卷49所收）、

66 崇禎吳縣志卷10・風俗の條に引いた高啓（青邱）の詞は左のようなものである。

東家西家罷來往、晴日深窗風雨響、二眠蠶起食葉多、陌頭桑樹空枝柯、新婦守箔女執筐、頭髮不梳一月忙、三姑祭後今年好、滿簾如雲繭成早、簾前繰車急作絲、又是夏稅相催時。

67 農村における絹織物業の經營内容については、たとえば、沈氏農書・蠶務の條に見える次ぎの記載から大體の事は想像出来る。

其常規、婦人二名、毎年織絹一百二十疋、每絹一兩、平價一錢、計得銀一百二十兩、除應用經絲七百兩、該價五十兩、緯絲五百兩、該價二十七兩、蠶絲錢、家伙、線蠟五兩、婦人口食十兩、共九十兩、數實有三十兩息、若自己蠶絲、利尙有浮。

68 補農書・總論。

一九五七年五月十三日稿了

## **On the Agricultural Economy of the Suchou Plain under Ming**

*Takanobu Terada*

From ancient times the alluvial plain of Suchou (蘇州) was one of the key areas in the economic history of China. Though no change in this situation took place under Ming, i.e., the economic importance of the area remained intact, the economic structure underwent a big transformation due to (1) heavy taxation and (2) the development of money economy caused by the influx of silver through silk trade. In the present article the author takes up the problem how the traditional pure husbandry was replaced by a new mixed form of agriculture, sericulture and cotton growing, and describes the process where the latter was becoming more and more important in the economy of the area. In the Ming period, especially in its middle and latter parts, the agrarian communities in Suchou became not only supplied with agricultural implements and fertilizers from outside but part of the larger money or exchange economy.

## **On a Mass Movement at Etche nd of Ming**

*Yuichi Saeki*

In the middle of the Wanli era of Ming (from the end of the 16th century to the beginning of the 17th) there arose a series of mass movements in the area along Lake T'ai-hu, protesting against the rule of the gentry and the bureaucracy. In the writings of those officials and landlords who were involved in the event we find materials which throw a light on the power structure based on landownership. The author takes up one of these movements, which took place at Nanhshün-chên (南潯鎮), Wu-ch'êng-hsien (烏程縣), Hu-chou-fu (湖州府), involving a powerful clan Tung (董), and its related clan by marriage, Fan (范), and describes the causes and development of the movement, and the policy taken by these two clans toward it. After analyzing the so-called "chia-nu" or household slave system, he finds that there were two different social strata, "hao-nu" (豪奴) and "ni-nu" (逆奴). Thus, the author points out some salient features of the "nu-pien" or slave movement, which took place in the